

53 彦二郎

山の奥に住む大蛇には神通力があつた。自分の体を大きくしたり、小さくしたり、自由自在やつた。

昔々、小坂（河和田町）に彦二郎といつても勇氣のある人がいた。春が来て田植えを終えると、いつもの年のように一人で大野郡の山まで漆かきに行つた。

彦二郎が山の奥へ入つて行くと、針金のような細い蛇がうしろをついて来る。どこまでもついて来る。彦二郎はピンときた。そして蛇にいつた。

「お前は本当は大蛇やろ。大蛇はぐつと小そうもなれると聞いているが、まだ見たことはない。本当かどうかいっぺんおれの手の上につけて、梅干みたいに小そうなってみてくれ。」



すると、蛇はさし出された手のひらにのつて、本当に梅干のように小さくまるまった。彦二郎は「いぞとばかり、その蛇をぱつと口に入れてかみくだいてしまつた。するとまもなく、ゴオツというものすごい地鳴りがして、山のような大蛇の死がいが谷底へ転がり落ちていった。そのあと、彦二郎のからだからは、沢山の小さな蛇が出てきたが、それを全部食い尽くした。」

このことを聞いた村人たちは、彦二郎のことを鬼彦と呼ぶようになったそう。

54 向い山の古ギツネ

別司と河和田の南の山は八幡山やけど、たいていは「向い山」つていうている。

山の低い所には、朽飯坂、猫坂つていう服間へ行く峠道があつて、昔はけっこう人が行き来してたんや。この向い山に大きな古ギツネが棲んでいて、ちよくちよく人をだましてたんやと。